大手前大学論集　第14号（2013）pp.85－105

モーパッサン『首飾り』を読む

柏　木　隆　雄

要　旨

ギ・ド・モーパッサン（1850－1893）はプロスペル・メリメ（1802－1870）とともに短編小説の名手とされる。メリメの短編はせいぜい10篇。しかし芥川龍之介も嘆賞するようにそれは完璧の域に達する。一方のモーパッサンは『メダンの夕べ』（1880）に寄せた短編「脂肪の塊」で文壇に登場したが、ほぼ10年あまりの作家生活の中で短編を無慮300余篇発表した。その中には珠玉の作品もあるが、粗雑なものも混在する。一般に彼の短編の白眉とされるのが『首飾り』（1884）で、日本でも早くからよく知られた名作である。

では『首飾り』がどういう点で短編として優れているか。短編は「オチのみごとさ」を称せられるものが多いが、メリメやバルザックの時代には、必ずしも「オチのみごとさ」を評価されることは少なかったように思われる。むしろ異常な物語展開に「本当らしさ」を見せるところに技量を誇ったようだ。むしろ19世紀の後半、ジャーナリズムが覇権を握るモーパッサンの時代になって、短編の切れの良さやオチが意識されたのではないか。『首飾り』を詳細に読み、その一年前に発表されたほぼ同じ趣旨の短編『宝石』とを比較しながら、モーパッサンの短編の構造を明らかにする。

キーワード：ギ・ド・モーパッサン、短編小説、文体論、テクスト解釈

Ⅰ．オチのみごとさ

短編というものの、いわゆる「オチ」が、いわば一種のどんでん返し、あっと驚くような結末であるのは共通の理解のように一見思われるが、18世紀のディドロなどの短編はともかく、「短編小説」が小説の有効な一ジャンルとして確立することになる19世紀の初め頃に名手と謳われたプロスペル・メリメの作品を読んでみると、必ずしもいわゆ

る「オチ」が際だっているわけではない。バルザックの短編にしても、鮮やかに舞台は暗転、読者があっけにとられて感心する、といった作品は案外少ない。かえってメリメの短編にしてもスタンダールの短編にしても、何か読者を不可解な闇の世界に引き込んで終わる場合が多い。むしろこうした「オチ」は19世紀後半、小説が商業的な産物となり、読者の消閑の具となりつつあった小説、短い時間でぐいぐい読者をひっぱったあと、さっと「オチ」を示して読者をあっけにとらせながら終わる、というスタイルが流行し始めたように思われる。なかでもモーパッサンは300篇にも及ぶその短編作品の中で（メリメと違ってその精粗の差はかなり大きいが）主に見られるもので、そのこともまたモーパッサンという作家の全体像についても示唆的なものがあるかもしれない。その意味で、彼の数ある短編小説の中でも傑作と言われる作品の結末を分析、考察することは、作家の特質の理解という点で重要と思われる。

中でも短編『首飾り』（原題*La Parure*, 1884）は、その出来栄えの点でおそらくはモーパッサン短編中十指に上るもので、語学の教科書などにもよく登場したものだ。美しく、魅力的な女性ながら、平役人の家に生まれて玉の輿の夢かなわず、やはり同じ小役人と結婚したヒロインが、不満の日々を送っていたある日、夫の勤める文部省の大臣から夜会の招待を受けるところから悲劇（あるいは喜劇）が始まる。

美人で魅力的な彼女の欠点、あるいは癖は、育ちに似ず、あるいはその育ちのゆえか、大の宝飾品好きであることだが、簡素（simple）な生活を余儀なくされている彼女には、せっかくの大臣招待の夜会に出る服も飾りもない。ドレスは夫の臍繰りで調えることができたけれど、そのドレスを着るためには今度は宝石が必要、という段になって、彼女の修道院時代の友人で、金持ちの夫人からダイアの首飾りを借りることによって首尾良く舞踏会にデビューできた彼女は、夜会の花形となって陶然とした時間を過ごす。帰りは着飾った夫人たちとの鉢合わせを嫌って、時間差で退出し、冴えない場末の４輪馬車で帰路に着き、やっとのことでアパートの階段を昇り、自室に戻って脱衣する際に借り物の首飾りがないことに気がついた。あちこち探し回るが見つからず、結局そっくりのものを高級店で買って夫人に返す羽目になる。代金は目を向くような４万フラン。夫の父親からの遺産で一部を払い、残りは借金することによって、首飾りを買い求めて、無事その友人に返しはしたものの、夫婦の生活は一変、家賃の安い屋根裏部屋に移り、夫は役所の他に内職の夜仕事もして借金の返済に追われる厳しい毎日となる。

彼女はかつては思いもしなかった家事労働、プチ・ブル夫人の面目は全くない有様で、それこそ髪振り乱し、衣服も構わず、市場では時には汚い言葉も口にして僅かのものも値切ったりもした。ようやく努力の甲斐あって、借金も利息もやっとのことで完済した10年後のある日曜日、その首飾りの貸し主、金持ちの友人に出会う。以下が有名な最後のオチの部分である。微妙なニュアンスを理解するために原文と訳文とを引く。

« Bonjour, Jeanne. »

L'autre ne la reconnaissait point, s'étonnant d'être appelée ainsi familièrement par cette bourgeoise. Elle balbutia:

« Mais... Madame ! ... Je ne sais... Vous devez vous tromper.

— Non. Je suis Mathilde Loisel. »

Son amie poussa un cri:

« Oh ! ... ma pauvre Mathilde, comme tu est changée ! ...

— Oui, j'ai eu des jours bien dures, depuis que je ne t'ai vue; et bien des misères... et cela à cause de toi ! ...

— De moi... Comment ça ?

— Tu te rappelles bien cette rivière de diamants que tu m'as prêtée pour aller à la fête du ministère.

— Oui. Eh bien ?

— Eh bien, je l'ai perdue.

— Comment ! Puisque tu me l'as rapportée.

— Je t'en ai rapporté une autre toute pareille. Et voilà dix ans que nous la payons. Tu comprends que ça n'était pas aisé pour nous, qui n'avions rien... Enfin, c'est fini, et je suis rudement contente.

— Tu dis que tu as acheté une rivière de diamants pour remplacer la mienne ?

— Oui. Tu ne t'en étais pas aperçue, hein ? Elles étaient bien pareilles. »

Et elle souriait d'une joie orgueilleuse et naïve.

Mme Forestier, fort émue, lui prit les deux mains.

« Oh ! Ma pauvre Mathilde ! Mais la mienne était fausse. Elle valait au plus cinq cents francs ! »

Maupassant, *La Parure*, in *La Parure et autres contes parisiens*, édités par M.-C. Bancquart, Classiques Garnier, 1984, p.464.

「こんにちは、ジャンヌ」

相手は正体が分からずに、驚いている。これほど親しげにお上さん風の女性に呼ばれるなんて。彼女は口ごもりながら答える。

「えーと.....失礼ですけど！.....どなたかしら.....お間違いと思いますが」

「いえ、私、マチルド・ロワゼルよ」

友達はあっと声を上げた。

「まぁ！　マチルドなのね、なんて変わってしまったこと！」

「そう、ずいぶん辛い毎日だったから。あなたに会った時からね。それに、とても惨めな思いもしたわ.....それもあなたのせいで！.....」

「私のせい.....どうしてなの？」

「あなた、覚えてるでしょう、あのダイヤの首飾り。あなたが私に貸してくれて、それで大臣のお祝いの会に出かけたのを」

「ええ。それで？」

「それで、ね。私、それを失くしたのよ」

「まぁ！　でも、あれ返して下さったじゃない」

「私があなたのところに持っていったのは別のそっくりなもの。だからここ10年私たちその支払いをしてきたのよ。わかるでしょう、それがそんなに簡単じゃないってことが。この私たちにはね、なにせ何にも無しときているのだから.....でもやっと終わったわ。だから本当にほっとしているのよ」

「つまり、あなたはダイヤモンドの首飾りを買って、私のものの代わりにしたってわけ？」

「そうよ。あなたは気が付かなかったでしょう、ね？　本当にそっくりだったもの」

彼女はにっこり嬉しそうに、どうだと言わんばかりの気持ちをそのままに微笑んでみせた。

フォレスティエ夫人は、ひどく動転してその友の両手をつかんだ。

「まぁ！　かわいそうに、マチルド！　でも私のは偽物だったのよ。せいぜい500フランくらいの代物だったのに！.....」

以上、二人の緩急自在に描き分けられた言葉の応酬だけで、一気に思いがけない結末に導く鮮やかな作者の手腕が見て取れよう。

Ⅱ．寓意の構造

これほど見事な「オチ」を演出するためには、当然さまざまな仕掛けが施されているに違いない。まず、その「仕掛け」を検討する必要があるだろう。あとでもう一度触れることになるが、「オチ」がみごとに決まるためには、それの対として、何よりも冒頭部分、書き出しの如何がやはり重要になる。この短編の書き出しはどうなっているだろう。先と同じように原文、訳文を引いてみる。

C'était une de ces jolies et charmantes filles, nées, comme par une erreur du destin,

dans une famille d'employés. Elle n'avait pas de dot, pas d'espérances, aucun moyen d'être connue, comprise, aimée, épousée par un homme riche et distingué: et elle se laissa marier avec un petit commis du ministère de l'Instruction publique.

Elle fut simple ne pouvant être parée: mais malheureuse comme une déclassée: car les femmes n'ont point de caste ni de race, leur beauté, leur grâce et leur charme leur servent de naissance et de famille. Leur finesse native, leur instinct d'élégance, leur souplesse d'esprit, sont leur seule hiérarchie, et font des filles du peuple les égales des plus grandes dames.

Ibid., p.455.

綺麗で、魅力的なのに、生まれが運命のいたずらで平役人の家という、そういう娘の一人だった。持参金の用意もなく、遺産の入る見込みもない。だから金持ちで、身分もある男に知られ、立場を理解されて、愛され、結婚するという手だてもなかった。で、彼女が言われるままに結婚したのは文部省の小役人とだった。

彼女の身じまいは簡素だった。飾りたてることができなかったのだ。じっさいあるべき身分から落された者のように不幸だった。なぜなら女というものは世襲の階級も、氏素性も問われず、その美貌、優美さ、魅力が、生まれとも家系ともなるのだ。生まれついての明敏、粋の本能、精神の柔軟さこそ、唯一女性の階層を作り上げるもので、それらが庶民の娘をやんごとない貴婦人と同等のものにするのである。

C'étaitと提示的表現で物語が始まることにまず注意しておこう。特定の女性に起こった話というわけではなく、どこにでもある話という含意が自ずと示されるわけだ。Elle（彼女）とだけあって、主人公の具体的な名が示されないことも、またその一般性を暗喩することになる。彼女が結婚することになるのが、文部省の小役人というところは、作者のモーパッサン自身がつい先頃まで勤めていた場所という一種のくすぐり、ブラックユーモアでもあろうが、ヒロインの夫がいわゆる子女の教育を司る役所に勤めている、ということは、単に小役人の世界が描かれるばかりでなく、じつは物語の本質にも関わる。「女というものは世襲の階級も、氏素性も問われず、その美貌、優美さ、魅力が、生まれとも家系ともなるのだ。生まれついての明敏、粋の本能、精神の柔軟さこそ、唯一女性の階層を作り上げる」と述べられるヒロインの心情、モラルは、平等をうたい、勤勉を讃える文部省の教育方針とは相容れないものであるはずなのだ。しかも当時の教育の、ある意味での本質は一種の立身出世主義を同時に根本に含意するから、彼女の夫が文部省小役人というのは、きわめてアイロニーに富んだものとなる。

そのことは、ヒロインを形容してただ一言simpleとしているところにも共通する。

simpleは純朴で、気取らない、謙虚なことを言うが、様子を飾らぬ、慎ましいことも意味し、さらに単純な、おめでたい人をも言う。もちろん、この句は読点なしにne pouvant être parée「飾りたてることができなかった」と続くので、２番目の意とわかるけれども、Elle était simple「彼女の身じまいは簡素だった」とあるこの叙述は、それこそsimple三様の意味が同時に読者に伝わることによって、作者のみごとな寓意が効果を発揮する。

またcar les femmes n'ont point de caste ni de race,「なぜなら女というものは世襲の階級も、氏素性も問われず」と、「女」がfemmesと複数で示されることによって、単にヒロインのみにかかわらず、一般の女性全体の論として述べられる形を取っているわけで、単数によっても表現できるところを複数で表現することによって、個々の女性のケース、女性の多くの具体的な例を想像させて印象を濃くしている。さらにcaste, raceから始まり、naissance, famille, native, instinctと連なって、女性の「生まれ」が強調されるかに見えながら、grâce, finesse, élégance, souplesseなど、本来女性の美質につながるはずの語がそれらを打ち消し、「庶民の娘をやんごとない貴婦人と同等のものにする」不思議を浮き彫りにする。そして同時にそれを自負しながら、そういう仕儀に立ち至らぬ主人公の苛立ちも自ずと切実に響かせるのである。

こうして物語の冒頭、ヒロインと思しき女性が、美しく魅力的なのに、小役人の家に生まれたばかりに身分ある男と結婚できないことが綴られた後、「女というものは世襲の階級も、氏素性も問われず、その美貌、優美さ、蠱惑が、生まれとも家系ともなるのだ。」（p.455）と、その魅力次第で身分低い女性も優雅な生活が可能なことを強調する言葉があるために（しかも、この文章はそのまま主人公の内的モノローグとも取れる）、いっそう彼女の悔しさが実感されるようになる。この悔しさ、不満のある女性のイメージは、じつは物語の最後で、金持ちの友人との出会いのオチにおいて、この短篇の底から、読後にじわっと効いてくるものともなるわけで、その意味でも冒頭と結末の対応は、実に見事になされている、と言うべきだろう。ついでに言えば、彼女を形容してただ一言simpleとしていたところも、物語が先に引いたオチの形で終わってみれば、つくづくその人柄として、味わい深い形容であったことも理解できるはずだ。そうして次に彼女の生活と感情についてこう記される。

> Elle souffrait sans cesse, se sentant née pour toutes les délicatesses et tous les luxes. Elle souffrait de la pauvreté de son logement, de la misère des murs, de l'usure des sièges, de la laideur des étoffes.
>
> Toutes ces choses, dont une autre femme de sa caste ne se serait même pas aperçue, la torturaient et l'indignaient. La vue de la petite Bretonne qui faisait son

humble ménage éveillait en elle des regrets désolés et des rêves éperdus.

Ibid., p.455.

彼女は絶えず憤懣を抱いていた。自分はあらゆる洗練された美味佳肴や贅沢な調度にふさわしく生まれついているのに。彼女には貧しい住まいが不満だった。みすぼらしい壁、すり切れた座椅子、不細工な衣類が不満だった。こうしたものすべては、彼女と同じ階級の女なら気づきさえもしないのに、彼女の身を捩らせ、憤慨させた。ブルターニュ出の小女が部屋の掃除をざっと済ませてしまうのを見るにつけ、索漠とした後悔と途方もない夢想が呼び覚まされるのだった。

Délicatessesは、普通には繊細さ、優雅さを言うが、複数形は美味佳肴を意味する場合がある。les luxesと対になっているので具体的なイメージとして訳してみた。もちろん「洗練された趣味」と「奢侈」の抽象的概念も同時に呈示するから、すぐあと具体的に示される「現実」との差異がきわめて効果的となる。貧しいブルターニュからの出稼ぎの女性は多くfemme de ménage（家政婦）として雇われた。「年端のいかない小娘」とあるだけに、ちゃんとした相応の家政婦を雇えぬ自分の家の程度が知れてヒロインの精神的惨めさが忖度される仕掛けになっている。しかもこの部分も後からみごとな効果を見せることになるので、ちょっと記憶しておいていただきたい。

現実の生活に倦んだ彼女の夢想に現れるパリの高級住宅は、彼女のアパルトマンの（普通ならそんなに大げさに嘆くこともないはずの）みすぼらしさと対照的に描かれる。客を迎える控えの間は、東洋風の厚い壁布が貼られ、むっとした暖かさにまどろむ短いキュロットの下僕といった、どこか官能的な表現があって、彼女の心身のうずきさえ感じさせる単語が次々と重ねられることに注意する必要がある。迎えるのはles amis（男友達。もちろん女友達もふくむだろうが）や女性の注意を喚起する男性の著名人。彼らが女性たちに知られ（connu）、求められる（recherché）男たちとして想起されることは、主人公自身の「知られ」、「求められたい」願望の現れに他なるまい。しかし、夕食にありきたりの「ポトフ」に、旨い！旨い！と舌鼓を打つ夫、立身の野心もなく、ひたすら日常の幸福を味わっている小役人の夫（彼が立身の基本を教えるはずの文部省の役人と言うことをもう一度思い起こそう）を見て、ますます彼女の願望の度合いが高まることになるが、それはモーパッサンの師フロベールが描いた『ボヴァリー夫人』の世界、まさしく若い日の修道院時代にロマンティックな空想に耽って、騎士の登場を憧れたエンマが、田舎医師ボヴァリーと結婚して味わう幻滅を思い起こさせる。

しかしフロベールが描いたボヴァリー夫人は、ノルマンディの田舎町に育って、大都市といえばルーアンしか知らない。もちろんパリにも足を伸ばすけれども、あくまで田

舎の女性として終始する人物だった。その弟子であるモーパッサンのヒロインは、エンマと違ってパリジエンヌ、花の都に育って美しく才気もあると自負しているわけで、その幻滅の悲哀は、日々豪奢の社交界を目にし、耳にし、しかもそこに参加することができず、まして金持ちの友人（それも少女時代の友人だ！）がいるともなれば、ますます底深いものとなろう。その上に彼女はとりわけて執念するものがある。

> Elle n'avait pas de toilettes, pas de bijoux, rien. Et elle n'aimait que cela: elle se sentait faite pour cela. Elle eût tant désiré plaire, être enviée, être séduisante et recherchée.
>
> Elle avait une amie riche, une camarade de couvent qu'elle ne voulait plus aller voir, tant elle souffrait en revenant. Et elle pleurait pendnat ces jours entiers, de chagrin, de regret, de désespoir et de détresse.
>
> *Ibid.*, p.456.

> 衣装など持っていなかったし、宝石類もない。何一つなかった。ところが好きなのはそれだけ。自分はそうしたもののために生まれたとさえ感じていた。それさえあれば、どれほど相手に気に入られ、欲せられ、迷わせ、求められるのも思いのままなのに。
>
> 彼女には一人金持ちの友人がいて、修道院で過ごした時の仲間だったが、もう二度とその友に会いに行こうとは思わなかった。それほど苦しい思いで帰ってきたのだった。そして彼女は涙ながらにその数日間ずっと不快や後悔、絶望、言いようのない悲しさを噛みしめた。

ここで、「衣装など持っていなかったし、宝石類もない。」（Elle n'avait pas de toilettes, pas de bijoux, rien.）と「彼女には一人金持ちの友人がいた」（Elle avait une amie riche）と二つの同じ構文のものが、行を隔てて並列されていることに注意しよう。持っていないものは、高価な衣装道具、宝石類、持っているものが金持ちの友人、しかしこの友人とも行き来をしなくなってしまう。つまり彼女にとってあらまほしきことが二つながらに、結局は持たぬものになるわけなのだ。その行き来の途絶えた「修道院時代の友」（une camarade de couvent）。かつてフランスでの女子教育は修道院で読み書き、躾などを行った。エンマ・ボヴァリーも修道院時代、ロマンティックな空想に耽ったことを思い出しておこう。

彼女がその修道院時代の友の家を訪れて味わった「不快や後悔、絶望、言いようのない悲しさ」Chagrin, regret, désespoir, détresseとある名詞は単に順番に羅列されている

わけではない。金持ちの友人の暮らしに打ちのめされた主人公の思いが、まず憂鬱な不快感、後悔、絶望、悲愁という順に、思い返してはますます悲嘆の度合いが深まる形で巧みに表現されている。ここでもその友人の名前が特定されずにいることに注意しよう。依然としてこの物語は、ヒロインが誰と特定しなくとも、誰にでも思い当たる、一般的な話の様相を示しているわけなのだ。

ところがある特別な事件が起こることによってヒロインの名前がはっきり示されることになる。夫が役所から意気揚々と帰って一通の招待状を差し出すことで、新たな展開となる。

> Elle déchira vivement le papier et en tira une carte imprimée qui portait ces mot:
> « Le ministre de l'Instruction publique et Mme Georges Ramponneau prient M. et Mme Loisel de leur faire l'honneur de venir passer la soirée à l'hôtel du ministère, le lundi 18 janvier. » *Ibid.*, p.456.

> 彼女はさっと封を切った。引っぱり出したカードには以下のように印刷されてある。
> 「文部大臣ジョルジュ・ランポノーおよびその夫人は、ロワゼル夫妻に大臣官邸での夜会に出席いただくよう懇請する。日時　1月18日月曜日」

彼女が封をさっと（vivement）に切るのは、その行為の激しさ、早さ、不作法さを示して、夫に対するいらだちと不満を露わにするが、同時にvif（生き生きした）との関わりから、それまで死んだような日々を送っていた彼女が、その時活き活きした「生」を一瞬に取り戻す響きを伝えるだろう。tirer「引く」の語は占いのカードを引く趣きさえあって、そこに印刷されてある言葉が、あたかも彼女の運命を予告するような印象を与える。そのカードの入った大きな封筒を渡す際の夫がl'air glorieux「鼻高々な態度」と形容されるのも、いかにも晴れがましいことの前触れを予想させる。

カードの文章はありきたりの役所風招待状。立派な書体で４、５行にわたって印刷されているのだろうが、月曜日の晩のことでもあり、単にsoirée「夜会」とだけあるので、それほど大がかりなものでなく、大臣による定期的な公的行事といったものと考えて良い。

注意すべきは、ここで初めて主人公夫婦の名前がロワゼルであることが明らかにされることだ。夫婦の名前はのちに説くとして、招待状に記される大臣の名前に注目しよう。Ramponneauの名はGarnier版（1984）の編者M.-C. Bancquaurtによれば、クリニャンクール通りにあったキャバレーの名前と同じという。その有名なキャバレーの名を（場所も

いわゆる低俗な歓楽街)、いやしくも文部大臣の名前にするのは文部省の仕事そのものに対する強烈な皮肉以外のなにものでもない。そしてここで単に「彼女」(elle）とだけしか表記されてこなかった主人公の名前が初めて明らかにされる。「ロワゼル夫人」(Mme Loisel)。ありきたりのフランス人の名前に過ぎぬように見えるが、Ramponneauという大臣の名に仕掛けがあるのだから、その大臣と並んで記されるLoiselについても一考を要しよう。すなわちLoiselはL'oiselleに音が通じ、その語は雌鳥を指すと同時に、俗語で「愚かな娘」を言う、その意味を効かせているに違いない。定冠詞がついてるから、まさしく「かの愚かな娘」ということになって、これまで女性一般を指し示す「彼女」(Elle）に固有名詞を冠したとしても、依然としてその一般性に関しても拭いさられていないことになる。

さてこのロワゼル（雌鳥）夫人は招待状を見ても一向に喜ばない。夜会に着ていく服がないと拗ねるのだ。まさしくロワゼル「かの愚かな娘」にほかならないが、ではどんなドレスかと問われて400フランはするものを、と言うのを、幸か不幸か、夫のロワゼル氏は友人たちと雲雀打ちに行くための猟銃を買う金を、ちょうどその額貯めていたのでそれを投げ出すことになる。ところがロワゼル夫人はまた浮かない顔。今度はドレスは新調したけれど、そうなるとまたそれにぴったり合うアクセサリーが要るというのだ。すると窮した夫は名案を思い付く。

> « Que tu es bête ! Va trouver ton amie Mme Forestier et demande-lui de te prêter des bijoux. Tu es bien assez liée avec elle pour faire cela. »
>
> Elle poussa un cri de joie.
>
> « C'est vrai. Je n'y avais pas pensé. »
>
> *Ibid.*, p.458.

> 「君は馬鹿だなぁ！　君の友達のフォレスティエ夫人に会いに行ったらいい。宝石を貸してほしい、って言うんだよ。君とのつき合いだ、それくらいはしてくれるさ」
>
> 彼女は喜びの声をあげた。
>
> 「そのとおりだわ。そんなこと思ってもみなかった」

ロワゼル夫人の修道院時代の友人フォレスティエ夫人の名（これもこの時初めて出されることに注意しよう）は、一年後に執筆される長編『ベラミ』に登場する女性の一人に付けられる、とプレイヤッド版やガルニエ版の編者は注記している。しかしここで重要なのはその名Forestierが「森に住む人（フォレスティエ）」と読めることだ。その名をロワゼルの夫が思

い出すことも見事な仕掛と言うべきだろう。彼自身は妻のドレスを買うために、友人と狩りに行くための猟銃を買うのをやめた。その彼が、妻の友達の名を思い出すきっかけとなったわけで、Forestierという「森」あるいは「森の住人」を意味する、狩りに縁のある語を思いつくところに、夫自身の複雑な心情が透けて見えて、その取り合わせの皮肉なユーモアに思わず頬が緩む。さらに妻マチルドの「そんなこと思ってもみなかった」« Je n'y avais pas pensé. »の言葉は、かつて貧富、階層、幸・不幸の差を思い知らされたはずの彼女が、初めてそうした金満の友人を持つ価値に思い至ることを示している。「森に住む人(フォレスティエ)」と「雌鳥(ロワゼル)」、狩りを仲立ちにした二つの組み合わせはぴったりと符合しているのだ。そしてこの組み合わせはロワゼル夫人が身を飾るべき宝飾類を借りに親友フォレスティエ夫人を訪ねる時（「雌鳥(ロワゼル)」が「森(フォレスティエ)」に庇護を求めるのはいかにも当然だ)、いっそう生彩を帯びることになる。「森に住む人(フォレスティエ)」が実は都会的な金持ちで、大きな宝石箱をどんとロワゼル夫人の前に据えて、さぁお好きなのをお選びと言う。そこに糧を求めて、数ある宝飾品からダイアの首飾りを選ぶ「雌鳥(ロワゼル)」。まったく鮮やかな手腕というほかない。

登場人物の名前の寓意はこれにとどまらない。夜会の当日、ロワゼル夫人は誰より美しく、エレガントで、愛らしく、にこやかで、楽しさに有頂天。どの男も彼女に視線を注ぎ、名前を聞き、紹介して貰おうとする。

さてその当日の文章。

> Le jour de la fête arriva. Mme Loisel eut un succès. Elle était plus jolie que toutes, éléganté, gracieuse, souriante et folle de joie. Tous les hommes la regardaient, demandaient son nom, cherchaient à être présentés. Tous les attachés du cabinet voulaient valser avec elle. Le ministre la remarqua. *Ibid.*, p.459.

> パーティの日が来た。ロワゼル夫人はもてはやされた。彼女はどの女性より綺麗だった。エレガントで、愛らしく、にこやかで、楽しさに有頂天。どの男も彼女に視線を注ぎ、名前を聞き、紹介して貰おうとする。大臣官房の館員たち皆が彼女とワルツを踊りたがった。大臣その人も彼女に目をとめた。

「ロワゼル夫人はもてはやされた」(Mme Loisel eut un succès.）とあるavoir un succèsは一般的な意味での成功を収めることを言うが、もちろん異性にもてることも言う。その場合、部分冠詞duがつくと継続的な意味合いがあるが、un succèsと単数で表現されて、彼女の「成功」がこれまでになく、今後もない、一度きりの印象を与える。その時の彼女の様子を示す形容が「エレガントで、愛らしく、にこやか」(jolie,

éléganté, souriante）と外見的なものばかりであることに注目する必要がある。「楽しさに有頂天」（folle de joie）はそうした彼女の得意のありさまを総括するものだ。この時短編の冒頭に彼女が夢見ていた、すべての男性の視線の的となり、「相手に気に入られ、欲せられ、迷わせ、求められるのも思いのまま」の世界が実現する。とはいえ彼女に視線を注ぐ多くの男たちの中で「大臣その人も彼女に目をとめた。」とある大臣の名前は、前述のとおりランポノー（Ramponneau）、低俗な歓楽街のキャバレーの名を負う大臣が注目する女性が「雌鳥（ロワゼル）」すなわち愚かな娘となると、華やかな舞踏会もたちまち何か猥雑な舞踏場のように見えてくるではないか。

明け方の午前４時まで夢のような時間を過ごしたマチルドに、別の小部屋で眠り込んでいた夫は冷えるからと妻の肩にコートを掛けてやる。他の婦人たちの豪華な毛皮コートに較べれば、彼女のコートは明け方の光になんともみすぼらしい。

> Ils descendaient vers la Seine, désespérés, grelottants. Enfin ils trouvèrent sur le quai un de ces vieux coupés noctambules qu'on ne voit dans Paris que la nuit venue, comme s'ils eussent été honteux de leur misère pendant le jour.
>
> Il les ramena jusqu'à leur porte, rue des Martyrs, et ils remontèrent tristement chez eux. C'était fini, pour elle. Et il songeait, lui, qu'il faudrait être au ministère à dix heures.
>
> *Ibid.*, p.460.

> 二人はセーヌ川の方へ降りていった。身も世もない気持ちで、寒さに震えながら。やっとの事で見つけたのは川岸の夜間専用の古い箱馬車だった。この手の馬車は今パリでは夜になってからしか見られない。まるで馬車がそのみすぼらしい姿を昼日中では恥じているかのようだ。
>
> 馬車は二人をマルティール通りの彼らの戸口まで運んでくれた。それから階段を昇る足音も悲しげに彼らの住まいに着く。終わったわ、と彼女。一方男は男で、10時には役所に出なければならないな、と思うのだった。

「二人はセーヌ川の方へ降りていった」（Ils descendaient）は南の方に向かうことだが、同時に歓喜の絶頂から「降りていく」ことも暗示していよう。まさしくセーヌ川のＳの字が、うねる形で彼らの運命の変転を暗示するかのように浮かんでくる。「箱馬車」（coupé）は２人乗りの４輪馬車で、簡便な辻馬車を言う。夜の光と闇にその本当のみすぼらしい姿を欺いて、昼は姿を見せないこの馬車、夜の舞踏会で華やかに踊ってみせ、朝の光を懼れるマチルドにどこか重ならないだろうか？

二人が帰ってくる住まいはマルティール通り（rue des Martyrs）。もちろん「殉教者たち」という意味で、夫婦、とりわけマチルドの気分を代言するかのような地名だ。と同時に小説が発表された1884年当時、軽演劇場Divan japonaisがこの通りにあったことを知ると、さらにこの劇場で「新妻の床」というややいかがわしく思わせるタイトルのものが演じられたりしたことを知れば、悲劇的状況と喜劇的状況をないまぜにする作者の皮肉なまなざしが透けて来よう。そして夫婦はまた自分たちの住居に「また昇っていく」。大臣の豪華な会場から、惨めに降りてきて、ふたたび重い足取りで昇る小役人夫婦のためいきまで聞こえそうだ。「宴は終わった」。マチルドならずともそう呟くしかない。

しかしじつは悲劇はそこから始まる。余所行きのドレスを脱いでみれば旧友に借りたダイヤモンドの首飾りが無い！　大騒動の挙げ句、高級宝飾店でやっと見つけた４万フランもする「そっくりの」首飾りを買って、以後10年間、借金まみれになっての生活は、文字どおり「殉教者たち（マルティール）」。貧困刻苦の生活を余儀なくされて、小論冒頭の最後の場面につながっていく。

Ⅲ．どんでん返しの底に

> Mme Loisel semblait vieille, maintenant. Elle était devenue la femme forte, et dure, et rude, des ménages pauvres. Mal peignée, avec les jupes de travers et les mains rouges, elle parlait haut, lavait à grande eau les planchers. Mais parfois, lorsque son mari était au bureau, elle s'asseyait auprès de la fenêtre, et elle songeait à cette soirée d'autrefois, à ce bal où elle avait été si belle et si fêtée.
>
> *Ibid.*, pp.463.

> ロワゼル夫人は今では老婆のように見えた。女ながら体も逞しくなり、厳しい顔つきで、立ち居振る舞いも荒っぽい。苦しい家政のやりくりがそうさせたのだ。髪に櫛を入れるのもなおざりに、スカートも横ざまに穿き、手は赤くなり、話す声も大きい。どっと水を使って床を洗ったりする。それでも時には、夫が役所に出かけていると、窓べりに座っては思い起こすのだった。あの昔の夜会、あの舞踏会。自分があれほども美しく、あれほどちやほやされたことを。

やっと負債は済んだものの、その代償に年に似合わぬ老いの相貌を負うことになった悲哀が、「今では老婆のように見えた」の「今では」の一語で浮き彫りにされる。物語冒頭、「美と優雅と蠱惑」を誇った女性の何という落差。「どっと水を使って床を洗った

りする」（lavait *à grande eau* les planchers）は、単に床をたくさん水を使って洗う、というだけでなく、「豊かに暮らす」（être *en grande eau*）の表現を思い起こさせ、さらにそのàとenの一字の違いで貧富の差が残酷なまでに浮び上がる。まことに皮肉だ。

そんなある日、ロワゼル夫人はシャンゼリゼ通りで旧友が子供を連れて散歩しているのを見かける。相変わらず若くて美しい昔の友。声を掛けるか、掛けまいか。声をかけて何もかもぶちまけようか。小論冒頭に引用した場面は彼女が呼び止めるところから、一気に結末に至る鮮やかな応答の妙が楽しめるだろう。翻訳では十分に表せていないが、マチルドの言葉づかいが、çaとかhein ?など、やや崩れた俗なものになっていることに注意する必要がある。それだけでもマチルドが陥った環境と、おっとりととまどいながら、品良く応対する旧友との違いを克明に抉り出す。またマチルドが「本当にそっくりだったもの」（« Elles étaient bien pareilles. »）と２つの首飾りの酷似が強調されているのも見逃せない。« Elles étaient bien pareilles. »のelles（それら）はもちろん二つの真珠の首飾りのことだが、ellesは「彼女たち」とも連なって、読者の目には「二人の女が実はまったくそっくり」という皮肉にも見えてくる。

ロワゼル夫人の修道院時代の友人の名Forestierは、先に説いた森という意味の他に「木樵り」という意味もある。まさしく「木樵り」さながらフォレスティエ夫人がざっくりと切り倒す一言でこの短編は鮮やかに落ちが付いて終わるのだが、10年も借金に苦しんだ末に、借りた首飾りが実は模造、というマチルドの運命を再び真っ逆様に落とす結末、そのお膳立てとして二人が出会う場所をシャンゼリゼ通りとするのは、もちろん金持ち夫人たちの散歩道というだけでなく、champs Élysée「極楽浄土」（champs Élysées）の語が生きて、地獄から天国、そしてまた最後に奈落に落とされる主人公の運命を皮肉に表象するものにほかなるまい。二人を出会わせる場所は作者の意図でどこにでも設定できるのだから。

まことにみごとな結末。しかし、ちょっとここで立ち止まる必要がある。フォレスティエ夫人の言葉を聞いたマチルドは、彼女につかみかかったか、泣き崩れたか。若い身空でなりふり構わずひたすら借金の支払いに追われての10年、いったいその苦労は何だったのか。虚栄心に駆られての浮かれた一夜の重い罰なのだろうか？。語り手はそのことには一切触れずに物語を閉じる。これこそは短編小説の常道、そのマチルドの以後の人生は読者の判断次第。判断の根拠はちゃんと本文の中に仕込んである、とでも言うように。

物語の始め、主人公は魅力的だが身分の低い娘たちの一人として登場し、マチルド・ロワゼルと名前が明らかになっても、それはランポノーやフォレスティエ夫人、さらに地名と同じように寓意性が強いものであることは、これまで述べてきたことで了解されよう。最後の場面に至って、主人公が旧友に自分が「マチルド・ロワゼル」と名乗るの

もきわめて象徴的だ。（マチルドという名前もmy childをフランス訛りを意識しての命名ではないかと思ってみたりするが、どうだろうか）すなわちこの短編がマチルドという一人の個別な女性の物語ではなく、一つの若い女性のタイプを描いたみせたものであり、また小役人のスケッチを含めて、フランス文学の伝統に根付いた深い人間観察による諷刺と寓意であることを明らかにする。

日本で『首飾り』として知られているこの作品は、*La parure*すなわち本来「身支度」から「アクセサリー」一般を意味する言葉が原題であることはご承知の通り。しかし、この作品のタイトルがどうして*Un collier*「首飾り」でなく*Une parure*なのか。parureはもちろんparer（飾る）の名詞形で、飾ること一般を言い、それから装身具をも言う。じつはこの短編の本来のテーマは「飾る」ということにあるのではないか。マチルドは何よりも宝石類で我が身を飾ることが好きな女性として登場している。「飾る」、それは「真実の姿」を覆うことでもある。

「彼女の身じまいは簡素だった。飾りたてることができなかったのである。」（Elle fut simple ne pouvant être parée）と短編冒頭に書かれていたように、マチルドは宝石など持つことが出来ず、嫌でも簡素な暮らしを送らねばならなかった。ところが素晴らしいダイヤモンドの首飾りを手に入れて、我が身を「飾る」ことで思いがけない成功に酔う。けれどもそれは一時の夢。他人から借りたその首飾りを落とすことによって、ふたたび彼女の真実に戻ることになる。そして文字通り冒頭に書かれていたように「飾りのない、簡素な」（simple）な生活となるわけである。結末のオチがみごとに冒頭の書き出しと照応している巧緻に感嘆するほかない。

文中にその「首飾り」をune rivière de diamand（直訳すればダイヤモンドの川）と何度か書かれるが、それはダイヤの粒の連なりを川の流れに見立てたものには違いないものの、「川」（une rivière）の語でマチルドの変転の人生を予告しているとも言えるし、彼女が辛苦の果てに支払いすませた、その代償の汗のダイヤモンドを象徴するものかもしれない。いずれにしても邦訳『首飾り』とあるのはミス・リーディングを誘うと言えようか。

では一方のフォレスティエ夫人はどうか。彼女は優雅な金持ち夫人そのものだが、そこに「飾り」はないのか。マチルドに頼まれて宝石類を惜しげなく見せる。友が選んだのは模造品だった。否、むしろフォレスティエ夫人は堂々と模造の宝飾品の入った箱を示したのだ。マチルドの選択は本物を見抜けぬ彼女の性（さが）を露呈することである。しかしそれを平然と貸すのは「真実」を隠すことにほかならない。つまり彼女もまた「飾って」いたのだ。しかも友が本物の首飾りを買って返したのに、彼女はそれを10年の間偽物として本物と区別できなかった。あたかも旧友と10年ぶりに会った時マチルドと見抜けぬように。その時のマチルドは、かつての虚飾を空しく欲しがる女性ではなくなって、文

字どおり、始めの形容にあったようにsimpleな女性、すなわち本物の人間になっていたのだ。

案外作者はフォレスティエ夫人のロワゼル夫人に勝る俗物性を描いたのではなかったでか。彼女がマチルドに貸した模造の首飾りが、500フランしたことを明らかにするのもその表れのように思われる。それはマチルドの亭主が苦労して整えたドレスの代金400フランを上回る額で、それとしても結構高額なものに違いない。それをせいぜい500フラン、というところに彼女のブルジョワ性が浮き彫りにされるだろ。彼女は確かに金持ちではあるけれど、ドが付いていないから貴族ではない。そして一方のマチルド。彼女の「女ながら体も逞しくなり、厳しい顔つきで、立ち居振る舞いも荒っぽい」姿に、また夫ロワゼル氏が妻に不平も言わず、ひたすら弁済のために夜昼働く姿に、そうした「飾る」生活から抜け出し、「真実」を生きる誠実さが切ない感動を呼ぶのと裏返しに、ブルジョワ社会の偽善が鋭く浮かび上がってくるところにこの結末の真骨頂がある。

Ⅳ．短編『宝石』の世界

しかし、こうして『首飾り』という短編を読んだ時、当然同じ種類の作品が思い起こされる。すなわち『宝石』*Les Bijoux*という短編。『宝石』は『首飾り』よりほぼ一年前に発表されたもので（1883. 3）、これも名作の評判が高い。話は内務省の官吏であるMonsieur Lantinがある夜会で一人の地方出身の若い娘をみそめ、結婚するとその娘はいかにも質素で、天使のようにはにかむ姿になんとも言えない魅力があり、結婚生活もまったく幸福そのもの。彼女は貧しい家計を巧みにやりくりして、豪華な食事や高級なワインまでも工面するほどの良妻だ。ただ唯一の欠点、というか夫の不満は彼女の芝居好きと宝石好き。芝居の切符は同僚の奥さんが持ってきてくれ、宝石はまがい物で済ませる。こうして毎日を楽しく暮らしている最中、寒い夜にオペラに行った帰りに彼女は風邪をこじらせて死んでしまう。悲嘆にくれた夫はなにもする気がなく茫洋とした日々を送る中に、安月給でどうしてあんな贅沢ができたのかと不思議に思う。彼はたった一人の生活でさえ借金ができ、ついに一文無し状態となって、ある日思い付いて、安物の模造品と知りながら、妻の持っていた首飾りを一つ宝石店に持っていくと、これが本物。残りの宝石もすべて本物で、合わせて20万フランという大金になる。どうして？と考えた末に得た結論は、それらが、誰かからの贈り物、すなわち妻の愛人からの貢ぎものいうことだ。これが一つのオチではあるが、さらに宝石を全部売り払って大金を得た彼は、役所を退職して、そのお金でゆうゆうと暮らすことになり、新しい妻も娶る。しかし、

Six mois plus tard il（Monsieur Lantin）se remariait. Sa seconde femme était très

honnête, mais d'un caractère difficile. Elle le fait beaucoup souffrir.

Maupassant, *Les Bijoux*, in *Op.cit.*, p.359.

半年して、彼（ランタン氏）は再婚することになった。二番目の妻はきわめて貞淑だったが、しかし気むずかしい女だった。彼女に彼はずいぶん苦しめられることになった。

という更なるオチで物語が締めくくられる。「二番目の妻はきわめて貞淑だった」とあるのは、その容貌やその他肉体的な美点についてはそれほど魅力でないことを暗示し、それだからこそ、また「気むずかしい」（d'un caractère difficile）女と念押しがされて、後のランタン氏の苦しみの内容も推し量られるように仕掛けられているのである。

この『宝石』（*Les Bijoux*）は確かに『首飾り』（*Une Parure*）と、一読、裏腹の関係にあり、語り口も同じように巧みだ。この短篇が実際に何かの新聞のゴシップ欄に載った実話をもとにしたものであることはよく知られている。あるいは『首飾り』のネタも同じようなところからかも知れない。じっさいよく読んでみると『首飾り』とよく似たところが散見する。たとえば夫が彼女の宝石好きを咎めた時の妻の答え。

« Que veux-tu ? J'aime ça. C'est mon vice. Je sais bien que tu as raison; mais on ne se refait pas. J'aurais adoré les bijoux, moi! »

Ibid., p.352.

「どうしろっておっしゃるの？　私はこんなのが好きなのよ。たしかに私の悪いところだわ。よくわかってるわ、あなたのおっしゃるとおりだった。でも人間は変わらないものよ。やっぱり宝石が大好きなの、私は！」

これはマチルドがひたすら宝石の類を愛する癖を思い出させる。また

Ses toilettes demeuraient toutes simples, il est vrai, de bon goût toujours, mais modeste; et sa grâce douce, sa grâce irresistible, humble et souriante, semblait acquérir une saveur nouvelle de la simplicité de ses robes, mais elle prit l'habitude de pendre à ses oreilles deux gors cailloux du Rhin qui simulaient des diamants,（...）.

Ibid., p.352.

彼女の衣装はまったく簡素なものでは確かにあったが、それが必ず良い趣味で、

しかも慎ましやか、その上優しさに満ちた優雅さ、堪えられないくらいでいて、遜(へりくだ)って、微笑みかけるような彼女の優雅さは、その衣服の簡素さに新しい味わいをもたらすようだった。もっとも彼女はいつのまにか両の耳に大きなラインの模造石で、ダイヤモンドに似せたものをぶら下げるようになった。（略）

「彼女の衣装はまったく簡素なものではあった」（Ses toilettes demeuraient toutes simples）とあるのは、マチルドが「彼女の身じまいは簡素だった。飾りたてることができなかった」（Elle fut simple ne pouvant être parée）と書かれてあるのを思い出させよう。しかも『首飾り』の場合、次のような文章が続いていたはずだ。

car les femmes n'ont point de caste ni de race, leur beauté, leur grâce et leur charme leur servent de naissance et de famille. Leur finesse native, leur instinct d'élégance, leur souplesse d'esprit, sont leur seule hiérarchie, et font des filles du peuple les égales des plus grandes dames.

Op.cit., p.455.

なぜなら女というものは世襲の階級も、氏素性も問われず、その美貌、優美さ、魅力が、生まれとも家系ともなるのだ。生まれついての明敏、粋の本能、精神の柔軟さこそ、唯一女性の階層を作り上げるもので、それらが庶民の娘をやんごとない貴婦人と同等のものにするのである。

こうしてみると、『宝石』のランタン氏の妻の美点は、ちょうどここに描かれているそのままのものがあるわけで、本来なら、それこそ「庶民の娘をやんごとない貴婦人」にするものだが、ランタン氏の妻はマチルドのように不満を見せない。というのもじつは彼女は、どうやら影の貴婦人の生活を楽しんでいたようなのだ。したがって夫と炉辺で二人きりで顔を突き合わせて幸福を味わっている時に、偽物と自称してわざと乱雑にそれらを夫の目の前に並べ、そればかりか、時にはその一つを夫の首にかけて、「まあ、なんてあなたはおかしいこと！」« Comme tu es drôle ! »（p.353）と笑ってもいられた。ランタン氏の妻の名前もまた明らかにされず、彼女としか表記されないのも、マチルドが終始「彼女」として、あるいは一般の女性全体を指し示すような名前で登場していたのと同様の暗示がそこにあるだろう。

しかしこの『宝石』という短編は、こうした妻（あるいは女性一般）の姿を描くことより、むしろすっかり欺かれていた夫を描くことに中心があるのではないか。なぜなら妻は物語を半ばすぎるまでに早めに退場し、あとは夫の側から、偽物と思っていたもの

が本物であったと知った驚き、そしてその本物の宝石の由来について思い当たる時の衝撃、そして、そうと知っての彼の宝石商と値をめぐってのしつこいほどの駆け引きの描写、さらに、思わぬ最後のどんでん返し、というか、いかにも彼らしい結末。そんな様子を描くのに精力が使われているように思われる。ここでもまたランタン氏の本物を偽物だとだまされる眼力のなさが浮き彫りにされる仕掛けだ。それは二番目の妻の選択にも表れている。

以上２作品の類似を指摘して、その関連する箇所を並べてみた。しかしじつは単に類似を指摘するためではない。むしろほぼ一年という、２作品を隔てる「時間」に注意を払わなくてはならないだろう。

例示が後先（あとさき）してわかりにくかったかも知れないが、『首飾り』は、『宝石』からずいぶん進歩した形で綴られている。たとえば名称の寓意について、『首飾り』では出てくる固有名詞の殆どが、パリの通りの名に至るまで、なんらかの寓意を含んだものであった。一方『宝石』で出てくる固有名詞は、じつはランタン氏のほか一切使われていない。ランタン氏のほかあるのはシャンゼリゼと「平和通り」(rue de la Paix)、そしてヴァンドーム（Vendôme）の円柱の３つの固有名詞にすぎない。これらの固有名詞の使い方については、それぞれその理由が忖度できるように思われるが、それは『首飾り』におけるものより単純だ。

では主人公であるランタン氏についてはどうか。これは単なる憶測にすぎないが、Monsieur Lantinは、すなわちMonsieur l'entend（なんでも彼女のいうことを聞く男）と取れるかもしれない。もちろんtinはtenと同じ音ではないが、しかしかえってそれに近い音をわざと示してほのめかす、ということはあろう。同様にtintinもまた連想として候補に挙げられるかもしれない。tintinはからっけつ、能なし、などにつけられるあだ名だ。しかしいずれにしても『首飾り』におけるような、複雑な、しかも効果的なものではない。また『首飾り』のロワゼル氏が文部省の小役人で彼に文部大臣から招待状が舞い込むのがそもそもの悲劇の始まりであった。一方こちらのランタン氏は内務省の役人とされている。内務省は内の治安を司るものであれば、いわば密会などはお手の物、それを探ったり、自身が密会する場合もあろうから、その意味でもおそらく内務省の小役人ランタン氏の妻のお相手は、おそらく内務大臣というところだろう。まさしくランタン氏は内務（Interieur）の官僚として、ある意味では無能であるために、家の中(Interieur)のことが見事にお留守になっている、という皮肉になる。ロワゼル氏の場合、公共教育(L'Instruction publique)となると、先にも言ったように、この小説の本質が「飾ること」への批判、さらに言えば「真実の見極め」ということとなると、まさしく公共の教育（L'Instruction publique）にかかわることになり、先の『宝石』の主人公のあくまで内的な悲喜劇に較べて、いっそう広がりのある、広い視野に立った文章と見ること

ができる。

では『宝石』の最後のオチについてはどうだろう。これもまた鮮やかさの点で、『首飾り』には劣るように思われる。『首飾り』の場合、先程も述べたように、その後、マチルドはどうしたか？という点に非常な興味を覚え、読者それぞれの感慨にふけることになる。しかし『宝石』の場合、また新たな物語の想像はなかなか難しい。厄介な妻に辛抱しきれず、新しい浮気の相手を探す、といったような平凡な、しかしモーパッサンの短編に幾つもでてくる話が予想されるのがせいぜいだろう。ついでに言えば『宝石』（*Les Bijoux*）とあるタイトルは、ある意味で宝石を愛する妻そのものもbijouであって、さればこそタイトルは複数形でなければならないのだ。「私の宝石！」（Mon bijou！）と呼んでいた妻。ある意味で安物まがいの女とおもっていたのが、実は大物の相手もつとめる本物の宝石！だったというオチにつながり、そういう宝石を見抜けなかったランタン氏は、次の女房についてもまたその本質を見抜くことができなかったという最後のオチに導くわけだ。この２作のオチへいたる語りの技巧を詳細にたどれば、１年後の作品『首飾り』において、作者の技量が格段に進歩していることがわかるだろう。モーパッサンの短編における一年が、じつに大きな意味があることを示す絶好の例と言えよう。

【付記１】

モーパッサンの『首飾り』については、今から７年ほど前に雑誌「ふらんす」（白水社刊）で対訳シリーズ４回の連載を依頼されて、原文を対比しながらモーパッサンの行文の巧みさを指摘しつつ、幾つか従来の解釈とは異なる新しいことを述べるようにつとめたが、「ふらんす」の依頼の後、ある出版社の企画で、小説の書き出し部分や結末部分を取り上げて、その優れたところを示すというシリーズの一部を担当することになり、それもモーパッサンの『首飾り』という指示がついた。その企画の一部は刊行されているが、私が依頼されたテーマの方はさっぱり音沙汰がない。おそらく原稿がうまく集まらなかったのか、集まった原稿がことごとく編者の意に満たなかったものか。いまさらその稿を起こしてうっぷんを晴らすわけではなく、こうした企画にありがちな枚数制限で、ぎりぎりのところしか述べることができなかった。それで「ふらんす」の連載４回分の文章と重なるところはあるものの、一応短編としての「オチ」の見事さ、という点から、この小説を考えた。大方の批判を乞いたい。

【付記２】

夏目漱石が読書の後に蔵書に感想を記していたことはよく知られているが、モーパッサンの短編『首飾り』について「此落ガ嫌デアル。ココニ至ツテ今迄ノイイ感ジガ悉ク打チ壊サレテ仕舞フ。ナゼモーパサンハカウダラウ。此一節ガナケレバ夫婦ノ辛苦シタノハ全ク義理堅イ美徳デ軽薄ナル細君モ此出来事ノ為メニ真正ナル人間トナツタノダカラ、読者モ非常ニ同情ヲモッテ読ンデ行カレルノニ、コノ結末ノ一節ノ為メニ夫婦ハ丸デ馬鹿ニサレテ仕舞フ。」と批判している。いかにも漱石らしい潔癖さと言えよう。芥川龍之介によれば、漱石はモーパッサンを「巾着切りのような奴だ」と言っていたという。その芥川は常にモウパスサンと表記した。『侏儒の言葉』に「モウパスサンは氷に似てゐる。尤も時には氷砂糖にも似てゐる。」とある。永井荷風はアメリカから念願のパリに着くとすぐさまモーパッサン像を拝しにモンソー公園に

赴いた。そして自分がフランス語を学ぼうと思ったのは「あぁモーパッサン先生よ。先生の文章を英語によらず、原文のままによみ味ひたいと思った」からだと書いている。明治以来、モーパッサンがそれこそ沢山の読者を日本で得たのも、鮮やかな切り口が際立ったことが大きい。